

戯曲 曾根崎心中、破！

人形

平野屋 徳兵衛

天満屋 お初

油屋 九平治

人形遣い

トオル (徳兵衛遣い)

ヒトミ (お初遣い)

タケヒコ (九平治遣い)

太夫 (語り)

太夫 1 (生玉神社)

太夫 2 (天満屋)

太夫 3 (曾根崎の森)

こども

※太夫のセリフの【かっこ】は、こどもが復唱する。

序（1・1） 「曾根崎心中」 ～生玉神社～

三味線にあわせて、太夫1とこども登場

太夫1 時は元禄、江戸時代【江戸時代】
ところは大坂、商いの町【商いの町】

茶屋で休んでいる徳兵衛

太夫1 神社の茶屋で休んでいるのは、
醤油屋に勤める二十五歳の若者、平野屋の徳兵衛【徳兵衛】

お初、駕籠（かご）から降り登場

太夫1 そして駕籠から降りたのが、
十九歳のうら若き遊女、天満屋のお初【お初】
今日一日、お客と一緒に大坂三十三の観音廻りを終えた帰り道。

お初 そこにいるのは、徳兵衛さまかい？

徳兵衛 お初じゃないか。どうしてここへ？

お初 （手を取り）ああ徳兵衛さま、いったい今までどこにいらしたの？
どうして顔を見せてくれないの？
私はもう心配で心配で、身も心も病んでしまいそう。
嘘だと思ふなら、ほら、胸のつかえを見てください。（胸をさわらせる）

徳兵衛 （慌てて手を離し）おお、すまなんだ、すまなんだ。
実は今日まで色々大変だったのだが、心配をかけまいと黙っていたのだ。

お初 ひどい、どうして言ったださらないの。あんまりです。
私はもう心配で心配で、身も心も病んでしまいそう。
嘘だと思ふなら、ほら（また胸をさわらせる）

徳兵衛 わかった、わかったから！

お初 では

徳兵衛 うむ、どこから話そうか

太夫 1

徳兵衛が語ったところによると、徳兵衛は店の主人から姪っ子との縁談を持ちかけられ、さらに田舎の養母が勝手にそれを承諾し、すでに持参金まで受け取ってしまった。ということ。

お初

それじゃあ、徳兵衛さまはもうその方と夫婦に・・・？

徳兵衛

いや、俺はお前という決めた女子がおる。もちろん縁談は断った。

太夫 1

そうして、田舎の養母の元へ急いで帰り、なんとか話をつけて持参金を取り返してきた。と、いうことであつた。

お初

私を思つて縁談を断つてくれたのはうれしいけど。大丈夫だったの？

徳兵衛

いや、ご主人様はたいそう怒つて、俺を店から追い出し、二度と大阪の地を踏ませないと言っている。しかし、俺にも男の意地がある。追い出されるのも承知の上。ともかく、後は金を返せば片がつく。

お初

ああ、私のためにそんな大変なこと。うれしく、悲しく、かたじけなく思います。だけど、お気持ちをしつかりとお持ちになつて。例え大阪を追い出されても何とでもなりましょう。この世がダメなら、あの世で一緒になる方法もあると聞きます。とにかく、早くお金を返して。

徳兵衛

そうしたいのだが、実は昨日、旧友の九平治に急ぎで一日だけ金を貸してほしいとたのまれ、他ならぬ友のたのみ、その金を貸したのじゃ。今日には返してくれるはず。おお、うわさをすれば。

九平治、酔つて、陽気に歌いながら登場

九平治

山寺のく春の夕暮れく来てみればく

徳兵衛

おい、九平治

九平治

おお、これは徳兵衛、久しぶりだな

徳兵衛

昨日金を借りておいて、久しぶりもなからう

九平治

金？何のことだ？

徳兵衛

何を言っておる？俺が昨日お前に貸した金じゃ

九平治 わしが、お前から？何を寝ぼけたことを

徳兵衛 それは、こっちのセリフ。昨日の今日。忘れたとは言わせぬぞ。
それに念のために、ほら、借用書も残したではないか。

徳兵衛 懷から借用書を取り出し、九平治に渡す。

九平治 おお、これは、確かにわしの判。だがこれは先月失くした古い判じゃ。
見つからぬので、わしはすでに新しい判に変えて、届けも済んでおるわ。
さてはお前、拾ったわしの判で偽の借用書を作り、わしから金をとろうと
いう考えか！（借用書を地面にたたき捨てる）

徳兵衛 何！ おのれ九平治、仕組んだな！
騙されたのは俺のほうじゃ。俺の金をかえさぬか！

九平治 何をしゃらくさい。

徳兵衛と九平治、取っ組み合い。

お初 あれ、誰か、誰か。

太夫 1 と、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

駕籠がきて、お初が無理やり乗せられる。

お初 あ、まっってお客さん、あれは私の知ったお方、平野屋の徳兵衛さまです。

お初、駕籠に乗せられ退場。徳兵衛、九平治に投げ飛ばされる。

九平治 （まわりに）おい、みんな。この男は、こんな偽の借用書をつくって、
友人から金を巻き上げようとした、大罪人じゃ。本来なら奉行所に
突き出すところ、これまでの付き合いに免じて許してやるわい。

九平治、笑いながら退場

徳兵衛 待て、おい。（まわりに）違う、俺ではない。俺は騙したりしておらん。
（しかし誰にも信じてもらえず）ああ、無念じゃ、無念じゃああ。

徳兵衛、悔し涙を流しながら退場

序（1・2） 「曾根崎心中」 ～天満屋～

太夫2 その夜のこと。【夜のこと】

ここは恋に恋する人々の、気持ちが流れる蜷（しじみ）川。【しじみ川】
その川のほとりにあるのが、お初の働く天満屋。【天満屋】
店に戻ったお初は、昼間のことが気にかかり、夜の仕事も手につかず、
一人、部屋の隅でふさぎこんでいたところ、
聞こえてくるのは、お客の話す徳兵衛の悪い噂ばかり。
「殴られ蹴られて死になさった」とか「人を騙して縛られた」とか

お初 ああ、もう言わないで。聞けば聞くほど胸が痛む。

店の表に編み笠を被った徳兵衛の忍び姿。

お初、これを見つけて

お初 （あたりを見回し、わざと聞こえるように独り言）

ああ、気持ち晴れないわ。外の風にあたってこよう。

お初、外へ出て徳兵衛に近付き

お初 徳兵衛さま！大丈夫なのですか？色々な噂を聞いて心配で心配で。

徳兵衛 世間がうわさするとおり。九平治に騙されて、俺はすっかり悪者扱い。

言い訳をすればするほど、立場が悪くなっていく。

俺は・・・もう、覚悟を決めた。

お初 （驚いて）待って。（あたりを見て）ここではゆっくり話もできません。

ここは私の言うとおりに。

お初、徳兵衛を着物の裾に隠し入れ、店に戻り、

そつと縁の下に徳兵衛を隠し、何食わぬ顔で縁側に座りこむ。

そこへ、九平治登場。

九平治 やあやあ、これは、今日はお客が少ないですなあ。

やあ、亭主、久しぶり。徳兵衛は来とらんか？

いいか、やつは偽の借用書をつくり、わしから金を巻き上げようとした
大罪人じゃ。今夜やつがここへきても店に挙げる必要はない。

縁の下では、徳兵衛が悔しさに身を震わせ、今にも出ていこうとするのを、
お初が必死に足で押さえている。

お初

（独り言のように）ああ、徳兵衛さまと私とは心深くわかりあった仲。あの人がそんなことをするはずはない。そんなことはわかっています。けどあの人のことだもの、嘘を嘘と言いたくても、証拠がないので言えずにいるの。世間に女々しく言い訳をするのが何よりも嫌いなお方。もしかしたら、あの方は、死ぬ覚悟をなさっているのかしら。

お初、独り言と思わせて、足で徳兵衛に尋ねる。徳兵衛もお初の足を自分の喉にあてて、自害する覚悟を伝える。

お初

やっぱり、あの方は死ぬ覚悟に違いない。

九平治

徳兵衛が死ぬものか。やつにそんな度胸はない。まあ、もし死んだなら、代わりにわしがお前をかわいがってやろう。

お初

これはありがたいことです。その時はあなたも殺すが、よろしいですね？

九平治

な、なに？

お初

ああだけど、徳兵衛さまと離れては、一時でも生きていられませんわ。徳兵衛さまが死ぬるなら、私も一緒に死にますわ。

九平治

なんだか居心地が悪くなっちゃった。別の店で飲み直した。こんな店、二度と来てやるものか。

九平治退場。

お初

旦那様、おかみさん、今夜は私が最後、戸締りをしてあげりますので、どうぞ、先におあがりください。皆様、お休みなさいませ。

お初、礼をする

序（1・3） 「曾根崎心中」 ～曾根崎の森～

太夫 3 しんと鎮まる午前二時【午前二時】

物音ひとつせぬように、店の扉をそろそろと開けて、
外へ飛び出す影ふたつ。【影ふたつ】

お初、徳兵衛の手をとり、登場。

お初 （徳兵衛と顔を見合わせ） ああ、うれしい！

太夫 3 ああうれしいと、死にゆく身を喜ぶ、哀れさよ。【哀れさよ】

手を取り合って進む道、草も木も空も、この世の最後と見上げると、
雲も無心に流れ、水の音も無心に響いてくる。

お初と徳兵衛、手を取り、時に見つめあいながら、道を進む

太夫 3 この夜ばかりは長くあつてと願えども、無常に短い夏の夜。【夏の夜】

死をせまるように鳴く鳥の声。【鳥の声】（こども鳥の鳴き声）

徳兵衛 （空を見上げ） ああ、夜が明けると困る。曾根崎の森で死のう。

太夫 3 そういつて、たどり着いた曾根崎の森【曾根崎の森】

徳兵衛 （一本の木の前で） さあ、ここにしよう。

お初 ああ、ひと所で一緒に死ねるなんて、こんなうれしいことはないわ。

徳兵衛 死ぬ時の苦しみで、死に姿が見苦しいと言われては無念だ。

この木に体をしっかりと結び付け、美しく死のうではないか。

お初 ええ、そうしましょう。

帯を取り、剃刀で2つに割く

お初 帯は割けても、あなたと私の間は決して割けないわ。

二人、お互いを木にしつかりと締め付け座り込む

徳兵衛 よう締まったか？

お初 はい、締めました。

お互いの姿を見て、涙を流す。

お初 いつまでも、こうしていても仕方のない事。早く、早く、殺して。

徳兵衛 承知した。

徳兵衛、脇差を抜き、お初へ向ける。しかし、手が震え、目もくらみ、2度3度と、切っ先の狙いがはずれる。

お初 あ

一声だけあげたお初の喉に刃が通る。じつと徳兵衛を見つめ、そのまま事切れる。

徳兵衛 自分も遅れをとるものか。一緒に行くと約束したのだ。

徳兵衛、脇差を自分の喉に突き立てる。そのまま絶え果てる。

太夫3 こうして曾根崎の森の下、命を絶った二人の姿は、
誰が告げるともなく風にのつてうわさが広まり、
これより先の多くの人の、恋の手本となりました。

太夫3、観客に深々と礼をする。

破（2・1） 本番後の夜、楽屋にて

ヒトミ え・・・なくなる・・・まっつて、どういうこと？

太夫3 だから・・・うちの劇団が、なくなるってこと。

ヒトミ うそ

太夫3 今日正式に決まった。もう来年からうちはない。

だから明日の千秋楽が、うちの劇団として最後の公演ってことになる。

ヒトミ 明日って・・・そんな突然

太夫3 突然ってわけじゃない。もうずっと前から赤字で採算が取れて
なかったんだ。それを色んなところから助成金をつけてもらって
何とかやってたのが、ついに見切りをつけられて、今年で打ち止め。

ヒトミ そんな・・・（トオルに）知ってたの？

トオル ・・・・ああ

太夫3 お前から、言っちゃれ。

トオル ・・・・仕方ないんだ。今日も見ただろ、がらがらの客席。

タケヒコ そうそう、入ってる客も半分くらいは寝てんだよ。

前のほうに座ってたのも婆さん、婆さん、一人飛ばしてまた婆さんだ。

太夫2 その一人は？

タケヒコ 爺さんだよ。似たようなもんだ。

太夫1 ようするに年寄りばかりだ。

もう時代遅れなんだよ、人形なんてのは。

ヒトミ そんな・・・だけど・・・

トオル お前だってわかってるだろ。

みんなでお客増やそうって頑張った時もあつたけど、
伝統芸能なんて、もう誰も興味がないって。

タケヒコ テレビ、映画、ゲーム、ユーチューブ。

そりや、もうね、勝てないって。時代の流れにはね。

ヒトミ ……わたしは、好きだよ……人形……

トオル そりや、俺だって。だけど、それだけじゃ、続けていけない。

タケヒコ ふたりも、次の仕事探しといたほうがいいぜ。

おれはもう就職活動はじめてっから。

太夫3 まあ、そういうことだ。残念だが……。

じゃあ明日で最後になるが、いつもどおり……たのむよ。
さ、帰るぞ。

太夫達3、退場

ヒトミ え……ちよつと待って。

(太夫1をつかまえ) だって、○○さん、来年は声の出し方を

研究して、語りの技術を磨いてみせるって、この前話したばかりなのに。

(太夫2をつかまえ) △△くんも、もつともつと練習して、

早く○○さんに追いつきたいって言ってたのに。

太夫1、2、何か言いたげだが、首を振り退場。

タケヒコ あーあ、結局俺は、最後の公演も悪者役か。

一度くらい、正義の味方もやってみたかったけどなあ。

タケヒコ退場

トオル さあ、明日もある。もう帰ろう。

ヒトミ ……いいの？それで

トオル ……いいも、悪いも……覚悟はしてた。仕方ないよ。

トオル退場

ヒトミ、しばらくその場に立ちすくむが、やがて明かりを消し退場。

序（2・2） 人形だけが残る、深夜の楽屋

誰もいなくなった楽屋。

真つ暗な部屋に三体の人形だけが、上半身を起こした形で並べられている。
しばしの静寂の後、お初人形の腕だけがゆっくりと動きだす

お初 ねえ．．．．

徳兵衛 ．．．．．

お初 ねえ．．．．

徳兵衛 ．．．なに？

お初 きいた？

あしたで．．．最後って．．．

徳兵衛 ．．．ああ

お初 ．．．徳兵衛さまと．．．いつしよにいられるのも．．
あしたが．．．最後に．．．なるかも．．．

徳兵衛 ．．．ああ

しばしの静寂。やがてお初のすすり泣く声。

徳兵衛 ．．．お初？

お初 ．．．わたし．．．もう．．．死ぬんは．．．いや。

いつも．．．せつかく徳兵衛さまと

いつしよになれるのに．．．さいごは．．．死んで．．．おわり．．．

昨日も．．．今日も．．．明日も．．．300年前から．．．

ずーっつと．．．さいごは．．．死んで．．．おわり

．．．もう．．．そんなんは．．．いや

徳兵衛 ．．．仕方がない．．．そういうお話や．．．

お初 ．．．わたしは．．．生きて．．．徳兵衛さまと、いつしよになりたい

徳兵衛 ……それは……無理や……

お初 ……わたしたちで……かえられん？

徳兵衛 え？

お初 わたしたちで……お話を……かえるん

徳兵衛 ……おれは……人形や……
人間に……あやつられんと……なんもできん……

またしばしの静寂。

お初の足が、ゆつくりと動き出す

お初 ……できんと思うから……できん

徳兵衛 お初……？

お初 できんと思えば……できる……
はっ！

お初、ゆつくりと足をたてて、ふんばり、立ち上がる

徳兵衛 た……立った！！

お初が……立ったああああ

お初 し……。し。

ね、できんと思えば……できる。
……さあつ。(徳兵衛をうながす)

徳兵衛 (え、俺？)

お初 (さあ、さあ)

徳兵衛、お初を真似てゆつくりと立ち上がるが、よろけてしまう。

お初 ふふふ……からだ……重たいでしょ？

いっつも人に、あやつられてるから、自分の重さも、忘れてしまう。

お初、足を開き、大きく四股を踏む

お初 しつかり地に足つけて、自分を支えるんです。

徳兵衛、足をふんばり、ゆつくりと立ち上がる。

徳兵衛 おお、立った！立ったぞおおおお！

お初 はい、立ちました。

徳兵衛 ・ ・ ・ お初

お初 ・ ・ ・ 徳兵衛さま

二人、かけよって抱き合おうとするが、足が動かない

徳兵衛 ああ、歩けん

お初 ようやく立てたところですから ・ ・ ・ 無理したら、あきません。

二人、見つめあい、うなずき、ゆつくりと座る。

お初 徳兵衛さまは、無理って言うたけど ・ ・ ・

明日、わたしは、わたしで、悔いの残らんよう ・ ・ ・ やってみます。
・ ・ ・ おやすみなさい。

徳兵衛 ・ ・ ・ おやすみ

二人、再び動かなくなる

九平治 はっ ・ ・ ・ ・ ・

急（3・1） 「曾根崎心中 千秋楽」 ～生玉神社～

太夫1 時は元禄、江戸時代【江戸時代】

ところは大阪、商いの町【商いの町】

茶屋で休んでいる徳兵衛

太夫1 神社の茶屋で休んでいるのは、

醤油屋に勤める二十五歳の若者、平野屋の徳兵衛【徳兵衛】

お初、駕籠（かご）から降り登場

太夫1 そして駕籠から降りたのが、

十九歳のうら若き遊女、天満屋のお初【お初】

今日一日・・・

お初 （太夫をセリフを遮り）そこにいるのは、徳兵衛さまかい？

太夫1 え・・・（ヒトミを睨む）

徳兵衛 （慌てて）お初。お初じゃないか。どうしてここへ？

お初 （手を取り）ああ徳兵衛さま、いったい今までどこにいらしたの？

どうして顔を見せてくれないの？

私はもう心配で心配で、身も心も病んでしまいそう。

嘘だと思うなら、ほら、胸のつかえを見てください。（胸を触らせる）

徳兵衛 （慌てて手を離そうとするがはなれない）おお、すまな・・・あれ？おい！

トオル、無理やり徳兵衛の体を離す。

が、お初人形、それに走り寄っていく。ヒトミもお初に引つ張られる。

お初 いや、離れたくない。

トオル、台本にないセリフに驚きヒトミの顔を見る。

ヒトミ、訳が分からず首を振る。

太夫1 （小声で）おい！何やってるの！

ヒトミ 違う、人形が勝手に。

太夫 1 勝手に？そんなわけないでしょ！

（客を気にして）とにかく続けて！

徳兵衛 （気を取り直して）うむ、どこから話そうか

太夫 1 徳兵衛が語ったところによると・・・

お初 知ってます。店の主人から縁談を持ち掛けられ、お母様がお金を受け取ってしまったから、それを取り返しに行ってたんでしょ？

太夫 1 わたしのセリフ！

トオル なんで・・・

ヒトミ 違う、違うの・・・

ヒトミ、訳が分からないが、お初が無理やりセリフを続ける

お初 それじゃあ、徳兵衛さまはもうその方と夫婦に・・・？

徳兵衛 いいや、俺はお前という決めた女子がおる。もちろん縁談は断った。

太夫 1 そうして受け取っ・・・

お初 （太夫 1 を遮って）ああ、うれしい！！
・・・ねえ、もう一度言っ

徳兵衛 え？

ヒトミの抵抗をよそに、お初はじつと徳兵衛を見つめ、言葉を待っている

徳兵衛 （仕方なく）俺はお前という決めた女子がおる。もちろん縁談は断った。

お初 （うっとりして）ああ、さすが徳兵衛さま！

しばし見詰めあう、お初と徳兵衛

太夫 1 （大きく咳払いして）そうして受け取った持参金を返すため

お初 （太夫の言葉を遮り）さあ、早く九平治さんにお金を返してもらって！

徳兵衛 いや、九平治のことはまだ話しておらんぞ

お初 え

しばし沈黙

太夫1 ああ、もう、どうなってるの。

（困って無理やり続ける）そこへ、九平治がやってきた

九平治、あわてて登場

九平治 山寺のく春の夕暮れく来てみればく

徳兵衛 おい、九平治

お初 九平治さん、早くお金を返してください

九平治 （驚いて）え・・・金？ な、何のことだ？

お初 あなたが、昨日徳兵衛さまから借りたお金です。
（徳兵衛に）ですよね？

九平治 わしが、お前から？何を寝ぼけたことを

徳兵衛 それは、こっちのセリフ。昨日の今日。忘れたとは言わせぬぞ。
それに念のために、ほら、借用书も残したではないか。

徳兵衛、懐から借用书を取り出し、九平治に渡そうとする

お初 あ、それはダメ！

お初、借用书を無理やり奪い、内容を確認する

お初 九平治さん、あなた、この判子、仕組んだでしょ！知ってるんですから！

九平治 は、いったい何のことだ？

お初、借用书をビリビリと破る。

徳兵衛　お初、何をする！

そのまま破った紙を撒く

お初　あら、きれい、花びらみたい。

これで証拠は消えました。徳兵衛さまを借用書偽造で訴えることはできません。

九平治　お初、貴様、はかったな！

太夫１　と、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

お初　（遠くの駕籠に）え、お客さん、あ、待つて、待つて

お初、強引に駕籠に乗り退場

タケヒコ　ははあ、わかったぞ、あの女。

今日でうちが終わるのが納得いかねえから、最後はもう無茶苦茶にしてやろうって魂胆か。おとなしい女だと思ってたが、怖い怖い。なあ。

トオル　いや、彼女はそんな子じゃ・・・

太夫１　そんな、なんとかしないと。

タケヒコ　大丈夫、俺がちゃんと止めてやりますよ。

さあ、とりあえずこの場は終わらずぞ。

九平治　（まわりに）おい、みんな。この男は、・・・借用書はともかく、

友人から金を巻き上げようとした、大罪人じゃ。本来なら奉行所に突き出すところ、これまでの付き合いに免じて許してやるわい。

九平治、笑いながら退場

徳兵衛　待て、おい。

（まわりに）違う、俺ではない。俺は騙したりしておらん。

ああ、無念じゃ、無念じゃああ。

太夫2 その夜のこと。【夜のこと】

ここは恋に恋する人々の、気持ちが流れる蜷(しじみ)川。【しじみ川】
その川のほとりにあるのが、お初の働く天満屋。【天満屋】
店に戻ったお初は、昼間のことが気にかかり、夜の仕事も手につかず、
一人、部屋の隅でふさぎこんでいたところ、
聞こえてくるのは、お客の話す徳兵衛の悪い噂ばかり。
「殴られ蹴られて死になさった」とか「人を騙して縛られた」とか

お初のセリフだが、無言。太夫2、困って何度か振ってみる

太夫2 ……とか……とか

お初 ああ、結局いつもとおんなじ場面。やっぱりお話は変えられないの？

またも台本と違うセリフをいうお初を、驚きの目で見つめるヒトミ。
店の表に編み笠を被った徳兵衛の忍び姿。お初、これを見つけて

お初 (あたりを見回し、わざと聞こえるように独り言)

ああ、気持ちが晴れないわ。外の風にあたってこよう。

お初、外へ出て徳兵衛に近付き

お初 徳兵衛さま！このままでは、またいつもと同じ。一体どうすれば……。

徳兵衛 世間がうわさするとおり。九平治に騙されて、俺はすっかり悪者扱い。

言い訳をすればするほど、立場が悪くなっていく。

俺は……もう、覚悟を決めた。

お初 待つて……どうして……どうして、いつもと同じことを言うの？

……どうして、「覚悟」だなんて、そんなことを言うの？

それじゃあ、今日もいつもと同じ。

今日かえないと……もう、だめなのに……

ねえ、徳兵衛さま……今日かえないと！

思わず大きな声を出し、口を押えるヒトミ

トオル ちよっと、どうしたんだよ！

一体何を言ってるの？

ヒトミ
（首を横に振り）わからない……本当に……人形が……勝手に……
……でも……お初は……今日、何かを変えようとしてる？
何かを……

話が進まないの、九平治が無理やり登場

九平治 やあやあ

お初、あわてて、徳兵衛を着物の裾に隠し入れ、無理やり店に駆け込み
そのままの勢いで縁の下に徳兵衛を隠す。

九平治 ん？今、ここに誰かいたような……まあいいや。

やあやあ、これは、今日はお客が少ないですなあ。

やあ、亭主、久しぶり。徳兵衛は来とらんか？

いいか、やつは偽の借用書を作ったり……作ってなかったりして、

ああ、ともかく、わしから金を巻き上げようとした大罪人じゃ。

今夜やつがここへきても、店に上げる必要はない。

縁の下では、徳兵衛が変な体勢のまま、動かないように我慢している。
時々動くをお初が必死に足で押さえている。

お初 （独り言のように）ああ、徳兵衛さまと私とは心深くわかりあった仲。

あの人がそんなことをするはずはない。そんなことはわかっています。

けどあの人のことだもの、嘘を嘘と言いたくても、証拠がないので

言えずにいるの。世間に女々しく言い訳するのが何よりも嫌いなお方。

もしかしたら、あの方は、死ぬ覚悟をなさっているのかしら。

徳兵衛、お初の足を自分の喉にあてて、自害する覚悟を伝えようとするのを、

お初、足を振り上げ

お初 なーんて。あの方に限ってそんなことはありません。

九平治 は？ お、おい、お初。徳兵衛は死なぬというのか。

お初 そうですわ。死にません。あの人、私も！

九平治 ……馬鹿な

タケヒコ 馬鹿な。心中話だぞ。心中で人が死なないなんて、そんなことあるか。

お初

・・・心中は・・・心の中を見せること・・・
徳兵衛さまを愛している・・・その気持ちはこの身をもって示すこと。
だから、私は、決して徳兵衛さまを死なせたりしない。
これからはずっと、私と一緒に、笑って、泣いて、年を取って、
生きて、生きて、生きていく。そう、他の誰でもない、私達だから
味わえる極上の日々を、1日また1日と、更新していくの。
そのためなら、私はどんな困難にだって立ち向かって見せる。
それが、私の、心中立て。

九平治

・・・何なんだ、まったく。
ああ、別の店で飲み直した。こんな店、二度と来てやるものか。

タケヒコ

いいか。お前がどんなに無茶苦茶にしようと、
話はこのまま最後まで進む。曽根崎の森で二人が死んで話は終わり。
それで、うちの劇団も、終わりだ。

ヒトミ

・・・終わりたくない

タケヒコ

・・・無理だろ

九平治、タケヒコ退場。

お初、じっとヒトミを見つめている。ヒトミ、その視線に気付き、お初を見つめ返す。

お初

できんと思うから・・・できん。

ヒトミ

え

お初、退場。ヒトミもそれに引つ張られ退場。

取り残される徳兵衛。困るトオルをよそにゆっくりと動き出す徳兵衛。

トオル

え、ちょ・・・

徳兵衛

はっ！（と気合を入れ立ち上がる）
（お初が退場したほうを見て）おはっ・・・

徳兵衛も退場。トオルもそれに引つ張られ退場。

急（3・3） 「曾根崎心中 千秋楽」 ～曾根崎の森～

太夫3 しんと鎮まる午前二時【午前二時】

物音ひとつせぬように、店の扉をそろそろと開けて、
（ドタドタと大きな物音。太夫3、顔をしかめて）
外へ飛び出す影ふたつ。【影ふたつ】

ドタバタと、お初、徳兵衛、登場。お初も徳兵衛も、すでに人形が主体的に動いており、ヒトミとトオルはそれに引つ張られている。

徳兵衛 ほら、歩けてるー。どう、歩けてるー？

お初 はい、しっかり歩けてます。

徳兵衛 これで、もうどこでも行ける。お初と一緒にどこへでも。

お初 （徳兵衛と顔を見合わせ） ああ、うれしい！

トオル 一体どうなってるんだ。全然いうこと聞かない

ヒトミ まるで生きてるみたい

トオル まさか、人形だぞ

ヒトミ じゃあ、何で

太夫3 いい加減にしろ！
こいつ（ヒトミ）だけじゃなくて、お前（トオル）もか！

お前らのせいで、千秋楽がめちやくちやだ。

トオル 違うんです。本当に人形が勝手に！

太夫3 そんなに、劇団をなくすことを決めたのが気に入らないのか？
仕方ないんだよ。それはお前もわかってるだろう。

トオル ……それは……わかってます

ヒトミ 本当にもう駄目なの？諦めていいの？

太夫3 やれることはやったんだ。他に何ができる？

ヒトミ

・・・

太夫3

時代に負けたんだ。

（太夫セリフに戻る）

ああうれしいと、死にゆく身を喜ぶ、哀れさよ。【哀れさよ】

お初

（太夫3を見つめ）残念ですけど、私も、徳兵衛さまも死にません。

太夫3

だから！

徳兵衛

なあお初・・・ずっと考えていたんだが、

俺は、騙されたとはいえ、罪人の汚名を着せられた身。

主人からも追い出され、この先たとえどこへ行つたとしても、
まともな暮らしなんぞできん。

だから・・・やっぱり・・・ここは、潔く死んだ方が

お初

徳兵衛さま・・・？

ヒトミ

（トオルに）ねえ、何とかしないと

トオル

（首を横に振り）気持ちわかる。俺だってここが無くなるのはいやだ。
でも、どんなものにも、いつかは終わりがくる。

だから、今日、最後、一番きれいな終わりを迎えよう。

徳兵衛

二人で曾根崎の森で美しく最後を迎えて終わり。それでいい。

お初・ヒトミ

（声を張って）はああ？美しく？最後を迎えて？終わり？？
そんなんで、本当にええんかああああ！！！！

トオル

えええええ！ それ、どっちのセリフ！？

ヒトミ

やれることはやった？何をしたの？
毎日毎日、いつも同じ演目をやって、ずっとそれを宣伝してきただけ。
そりゃお客さんだって飽きるわよ！

太夫3

偉そうに！何が悪い？それが伝統芸能つてもんだろ！

ヒトミ

伝統？

人形は・・・曾根崎心中は、伝統だからここまで続いてきたの？

太夫3 そうだ！

トオル ちがう！

太夫3 え？

トオル ・・・・曾根崎心中は、それまで古い時代物しかなかった人形浄瑠璃で、

当時身近でおこった若者の心中事件をリアルタイムに取り上げた。

斬新で、挑戦的で、革新的で、何よりもめっちゃめっちゃエモい作品だった。

それが敏感な若者の心をとらえた！だからあんなに大ヒットしたんだ！

お初と、徳兵衛の姿に、皆が心惹かれた、涙した、あこがれた。

太夫3 お前まで何を言ってる？

ヒトミ 伝統なんていう要らない重しがあるから、飛び上がれなくなるの。

300年も変わらないでいたら、どんなトレンドドラマだって、

ただの古典になっちゃうわ。

だから・・・そう・・・伝統なんてこだわらず・・・

心の中の感性を、情熱を信じれば、まだきつと

お初 きつと・・・大丈夫です。

徳兵衛 お初

お初 家も、仕事も、身分も、そういったもんを全部捨てても、

胸の中に、熱いもんを持つていけば何とか生きていける。

そんな時代が来る。なんも根拠はありませんけど、

私たちの未来がそう言ってるような気がするんです。

さあ。

徳兵衛、うなずき、お初の差し出した手をとる

太夫3 お前らの好きにさせるか！

（太夫セリフを続ける）

この夜ばかりは長くあつてと願えども、無常に短い夏の夜。【夏の夜】

死をせまるように鳴く鳥の声。【鳥の声】（こども鳥の鳴き声）

徳兵衛 （空を見上げ）夜が明ける前に、ここを抜け出さんと。

太夫3 そういつて、たどり着いた曾根崎の森【曾根崎の森】

お初 いや！

徳兵衛 （一本の木の前。じつと木を見つめ）よし。
（お初に）帯を

お初 徳兵衛さま？まさか・・・（やつぱり死ぬ気？）

徳兵衛 ここからは、お前と俺は一身動体。決して離れぬよう、帯で
体をしっかりと結び付け・・・大阪の街を駆け抜ける！

お初 はい！

帯を取り、二人、お互い自分の体に結び付ける

徳兵衛 よう締まったか？

お初 はい、締めました。

お互いの姿を見て、笑いあう。

徳兵衛 さあ、行くぞ。

太夫3 待て待て、そんなことが許されるか。お前たちの死に場所はここだ。
（袖に）おい、こいつらをおとなしくさせる。

袖から、太夫1、2が登場。徳兵衛とお初にゆつくりと近付く。

徳兵衛 逃げるぞ。

駆け出す徳兵衛とお初。あわててその方向に回り込む太夫1

ヒトミ 危ない！

ヒトミとトオルの遣いで、人形たち、間一髪方向を変えて、太夫をかわす。

太夫3 何をやってる、そっちだ。早く捕まえんか。

しばらく、徳兵衛とお初と太夫1、2の追いかけあいが続く。

ヒトミ 待つて！人形たちの声を聞いて！

お初と、徳兵衛が、必死に変えようとしているの。
私たちができなかったことを、やろうとしているの。
なのに私達はこれでいいの？私達も変わらないと！

トオル そうだ、俺だって、このまま終わりなんて嫌だ。

本当はみんなだってそうじゃないのか！？

太夫1、2に挟まれて、中央の木の前に追い詰められる二人。

太夫3 よし、もう逃げられん。そのまま二人を木に縛り付けてしまえ！

ヒトミ お願い・・・

太夫1 （突然太夫口調で）と、そこへお初の客を乗せた駕籠がやってきた

太夫3 は？

太夫2 （察して復唱） 駕籠がやってきた

袖から慌てて駕籠が登場。 駕籠にお初と徳兵衛が乗り込もうとする

太夫3 馬鹿な！お前らまで何を言ってる！？逃がすか！

駕籠を慌てて捕まえに行く太夫3。

その前に九平治が駆け込んでくる。 タケヒコもそれに無理やり引つ張られる。

九平治 （太夫3を止めるポーズで） 待てい！ここから先はわしが行かせねえ。

太夫3 え・・・お、おい・・・（タケヒコに） どういうことだ！

九平治 たまには正義の味方をやってみたかった！

（タケヒコを見て） だろ！

タケヒコ、驚いて、そして、その気になって

九平治 さあ、徳兵衛、お初、ここはわしに任せて、とつとと逃げるんだ！

なんぴとたりとも、これより先へは、行かせねええええ（見栄をきる）

太夫1　　そうして駕籠は二人を載せて

太夫2　　（太夫1にうながされ）あ・・・えっと・・・

光よりも早く飛び去った！

太夫2の言葉に、驚いて顔を見合わせる4人（トオル、ヒトミ、太夫1、太夫2）

トオル　　大丈夫、できると思えば、できる！

4人　　（顔を見合わせうなずき）せーの、

はーーーーー！

お初と徳兵衛を載せた駕籠を勢いよく退場。それに合わせて4人も退場。
舞台上に残される、太夫3、九平治、タケヒコ。

太夫3　　（その場に崩れ落ち）無茶苦茶だ・・・

タケヒコ　あ・・・もう満足・・・

なんか・・・変な空気だから・・・とりあえず去りましょう

タケヒコ、九平治とともに退場しようとする

九平治　　痛！

タケヒコ　　え？

九平治　　急に・・・激しく動いたから・・・体が、痛くて・・・動けない

もっとゆっくり・・・そう、ゆっくりと・・・あああ、痛い痛い・・・

スローモーションで退場していく九平治。

一人残された太夫3

太夫3　　（客席を見て、困って）こりや・・・なんというか・・・

（咳払いして）

こうして曾根崎の森の下、光よりも早く飛び去った二人の姿は、
誰が告げるともなく風にのってうわさが広まり、

これより先の多くの人の、「新しい」恋の手本となりました。

太夫3、観客に深々と礼をして退場。

(拍手)

こどもたち登場

こども

こうして、この日お披露目された新しい演目、

曾根崎心中(全員で) 破っ！

は、世間の評判となり、お客様もどんどん増えて、劇団がつぶれる話もなくなった、ということです。めでたし、めでたし。